

保育における「高齢者とのかかわり」

～世代間交流概念から領域「人間関係」をとらえ直す

Relationships Between the Elderly and the children from the viewpoint of intergenerational Exchange

保育科 尾崎 司

はじめに

人口減少社会においては、これまでの人口増加時代とは質的に異なる多世代交流・共生への取組が求められており、どのようにして世代間のバランスを取り、地域コミュニティで住民が支え合う仕組みを育てていくかが喫緊の課題となっている^(注1)。少子高齢社会における子どもを取り巻く環境は、核家族化、家族構成の多様化、子育ての孤立、身近な地域における多様な人間関係の喪失など、人間関係は希薄化し問題はますます深刻化している。子ども世代だけでなく親世代も、住環境が多世代ではなくなり地域体験が乏しい中で育ってきており、日常生活の中で地域の人々や高齢者と接触する機会がないまま、同質的集団の中で過ごすことが多くなってきている。斎藤（2010）は、「今の子どもたちは史上まれに見るほど『同質のひとたち』としか関係せずに成長するような環境に置かれている」と述べ、異世代との接触不足のまま子どもが成長することで様々な弊害を引き起こすのではないかと危惧している。また、背景の異なる文化から生まれるイノベーションが必要とされる時代に、ダイバーシティ（多様性）が認められない社会は、持続可能な共生社会となりうるものであろうか。世代間分離と同質化は、幼児期から取り組まなければならない課題なのである。

これまで、保育の分野では、領域「人間関係」のなかで「地域・高齢者とのかかわり」に関する項目が重視されてきたが、この項目を世代間交流概念から捉え直すことによって、人口減少社会における保育のあり方が見えてくるのではないだろうか。近年、高齢者世代と子ども世代との世代間交流（幼老統合ケア）の取り組みが注目され、世代間交流概念という新たな枠組みから研究や実践をとらえ直そうという動向もある（中井2008、草野ら2010）。幼老統合ケアは世代間交流の貴重な機会を提供するだけではなく、コストの観点や介護と保育のダブルケアの問題にも有効であると言われている。

そこで、本稿では、世代間交流の観点や幼老統合ケアの取り組みから、領域「人間関係」における「高齢者とのかかわり」を検討することによって、どのような可能性があるのかを考察したい。

1. 領域「人間関係」の変遷と課題

（1）領域「人間関係」における「高齢者とのかかわり」

平成29年告示の幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領（以後、新教育要領、新保育指針、新教育・保育要領）では、幼児の人間関係を育むために、[社会生活との関わり]の項目で、次のように述べられている。

「家族を大切にしようとする気持ちをもつとともに、地域の身近な人と触れ合う中で、人との様々な関わり方に気づき、相手の気持ちを考えて関わり、自分が役に立つ喜びを感じ、地域に親しみをもつようになる。また、幼稚園（＊保育所・幼保連携型認定こども園：筆者加筆）内外の様々な環境に関わる中で、遊びや生活に必要な情報を取り入れ、情報に基づき判断したり、情報を伝え合ったり、活用したりするなど、情報を役立てながら活動するようになるとともに、公共の施設を大切に利用するなどして、

社会とのつながりなどを意識するようになる」

すなわち、家族を核として人間関係の拡がりを直接触れ合う中で感じ、親しみを持つ段階があり、そうした交流体験においてなされる情報交換を自分に結びつけ、活用し、社会生活への参画を踏み出すことが重視されている。

また、新教育要領、新保育指針、新教育・保育要領における領域「人間関係」の内容には、次のように述べられている。

「高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ」

続いて、幼稚園教育要領・保育所保育指針の「運営上の留意事項」では、保育者のかかわりとして、子どもの生活の連続性を踏まえ、家庭及び地域社会と連携して保育が展開されるよう配慮し、家庭や地域の機関及び団体の協力を得て、高齢者という人材、行事、施設等の地域の資源を積極的に活用し、豊かな生活体験をはじめ保育内容の充実が図られるよう配慮することが求められているのである。ともすると、子ども同士という同世代の人間関係のみに目が行きがちである。しかし、日々の子どもの生活の流れの中で、社会資源（リソース）を活用し、連携を作り出すということが実態としてどのくらいできているだろうか。また、他の保育内容と同程度に「地域・高齢者とのかかわり」は重視されているのだろうかと考えると、もっと重視されるべき項目である。

（２）内容項目「地域・高齢者とのかかわり」の変遷

「地域・高齢者とのかかわり」が項目として特に「高齢者」という言葉が記載されるようになったのは、平成10年版幼稚園教育要領からである。それ以前は、表1のように、「高齢者をはじめ地域の人々など」という具体的な表記はなかった。

表1. 幼稚園教育要領 領域「人間関係」の内容項目の変遷

改訂年	項目
平成元年	自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ
平成10年	高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ
平成20年	高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ
平成29年	高齢者をはじめ地域の人々などの自分の生活に関係の深いいろいろな人に親しみをもつ

こうした背景には、大家族の崩壊、核家族化や晩婚化・非婚化などによって、少子高齢化が加速し、子ども会や町会など地域コミュニティが衰退するなど、地域とのかかわり、そして人とのかかわりの希薄化が社会問題化してきた経緯がある。また、青少年による残虐な殺傷事件や社会的弱者を狙った事件などが多発し、社会的弱者への社会的排除・疎外感が浮き彫りになってきた時代の様相が後押ししている。この項目は、単に「地域や高齢者とのかかわり」だけでなく、価値規範や道徳性の低下、家庭の愛情の問題、自己肯定感情の低下など領域「人間関係」の他の内容項目とも結びついている。

核家族化の問題は、子どもの家族、高齢者、地域でのかかわりに大きな影響を及ぼしているが、人口減少社会では核家族世帯は減少傾向にあり、子どものいる世帯の減少と単独世帯の急激な増加による「家族変動」が起きている（宮本・大江、2017）。今後、家族のあり方が多様化する中で、「地域や高齢者とのかかわり」が保育内容としてどのような意味を持つのかを再考しなければならないだろう。

2. 世代間交流による幼老統合ケアの試み

(1) 世代間交流プログラム

藤原（2013）は、世代間交流とは「異世代の人々が相互に協力し合って働き、助け合うこと、高齢者が習得した知恵や英知、ものの考え方や解釈を若い世代に言い伝えること」というサリー・ニューマンの定義を用いて紹介しつつ、世代間交流は高齢者と子どもにとって意義のある活動であり、心身の健康のみならず社会的健康に寄与すると述べている。しかし、近年、社会構造の変化に伴い、核家族化やコミュニティの崩壊が進み、世代と世代のつながりや交流が自然発生的に生じることは困難になってきている。そこで、世代間交流を意図的に仕掛けることが必要とされ、今日、それは世代間交流プログラムと呼ばれ、様々な試みがなされているのである。

世代間交流プログラムとは、国際世代間交流協会によると「社会に存在する様々な資源や知識・知恵を高齢世代と若年世代の人々で交換し合い、個々人や社会の役に立つものにしていくための意図的・継続的な仕掛け」である（藤原、2013）。世代間交流プログラムの内容（表2）としては、日常的な交流から、生活の伝承、遊び（伝承遊び）、児童文化財（おもちゃや絵本）、食などが媒介となる活動が中心となり、実践事例が紹介されている。

表2. 世代間交流プログラムの内容

形態	場	実践事例
複合施設	幼老統合施設、福祉複合施設等	江東園、ゴジカラ村
事業連携	施設間の交流行事（保育課程、支援計画）	〇〇会、交流ランチ
事業	子育て支援拠点、児童館、おもちゃ美術館等	おも路地、りぶりんと
参加・招待	小学校、保育園、学童保育、デイケアセンター等	定時交流、訪問、ゲスト

(2) 幼老統合ケア

これまで述べてきたように、様々な世代間交流プログラムが試みられる中で、比較的うまく機能していると考えられるのが、幼老統合ケアであろう。実際に、高齢者福祉・介護施設を運営する社会福祉法人や株式会社が、高齢者との交流を取り入れた保育園や複合施設を設立するケースも増えている。幼老統合ケアは、従来分離されてきた子どもと高齢者が相互に交流し、交流を組織化することにより、ケアの相乗効果を図ったものであり、教育効果のみならず経済効果も期待されている（中井、2009）。

幼老統合ケアの取り組みは、以前から実践はあったが、近年、K・ホークスのグランドマザーリング仮説（おばあさん仮説）や広井の「人間の三世代モデル」、また富山型と言われるケアのあり方に関する考察を背景に、理論的枠組みづくりが始まっている。また、それぞれの専門の壁を取り払い、「子育て」、「家族の暮らし」、「高齢者の生活」を相互に関連づけ、トータルな暮らし方の変更をもたらす（中井、2009）という意味では、幼老統合ケア施設（世代間交流施設）を設置し交流を図ることは、世代間分離に対する一つの解決策を提示する。

しかし一方で、カプランとタン（2008）が行なった世代間交流の国際研究では、こうした日本の幼老統合ケア施設（世代間交流プログラム）は、「3世代同居家族」という文化的理想へのノスタルジックな感情を伴ったものであり、1世代前の人々にだけ通用する孝行という概念に基づいたモデルであると指摘されている。「3世代同居家族」というメタファーが多用されているにもかかわらず、日本の現実社会では、年齢差別が1つの規範となっており、相矛盾していると述べられている。このことは、日本の現実社会において家族のあり方が急激に変化する中で、「3世代同居家族」のモデルに代わる世代間交流の新たなモデルが必要であることを示唆している。

幼老統合ケアの課題としては、中井（2008）が指摘するように、子どもが高齢者ケアにとってのエンパ

ワメントの資源とされており、子どもの育ちや相互発達の見点から幼老統合ケアを捉えた研究は少ない。したがって、今後、子ども研究や相互発達の見点を踏まえた検討も必要となってくるだろう。

(3) 世代間交流施設（幼老統合ケア施設）の取り組み

「世代間交流施設の挑戦 保育と介護はどのように融合しているのか」(2016)には、下記のように、社会福祉法人や株式会社、NPOなどが設立した様々なタイプの幼老統合ケア施設の取り組みが紹介されている。幼老統合ケア施設の特徴は、「一つ屋根の下で日常的に交流」という同居形態である。江東園のように、1階に保育園、2階に養護老人ホーム、3階に特別養護老人ホームという形態もあれば、同じ敷地内に隣接している形態もある。八王子ふたば保育園は同居という形態ではなく、積極的に訪問型の世代交流を行い、保育の軸に据えている。世代間交流に対するスタンスにもそれぞれの考え方で微妙に違いがある。中都是「お互いが無理をすることなく」自然体で過ごせるように配慮している。東綾瀬きらきら保育園とグループホームきらら東綾瀬の双方のスタッフは、改まった形での「交流」よりふだんの「関わり」を重視している。その自然な形での交流を促しているのが、園庭とウッドデッキ、両施設の間にある共有空間であるという。他の施設でも、中庭が居場所や集う場になっているという意見が多い。仕切りや壁を作らない、共有空間がひらかれているという空間設定は、世代間交流を促進する環境なのである。

活動は日常的な交流をはじめ、時間帯を決めて交流・訪問する、自由に行き来できるなど様々で、スタッフで話し合い決めている。交流内容は遊びが中心であり、歌う、一緒に製作する、体を動かす、調理をする、読み聞かせ、着替えや寝かしつけ、朝のラジオ体操、季節行事、運動会、サマーキャンプ、クリスマス、お遊戯会など、子どもや利用者である高齢者の状況や興味関心に合ったものになっている。

こうした活動を、高齢者、子ども、保護者、スタッフはどのように感じているのだろうか。次のコメントのように、高齢者は子どもと接することで心身の健康のみならず社会的健康や自信も取り戻し、相互交流によって活動がさらに促進されている。

「足が悪くて室内に籠りがちで、散歩に行くこともしなかった人がいます。私たちスタッフが誘っても、なかなか出てきてくれません。ところが、中庭で歩行練習をしているときに子どもたちが遊びに来て、手をつないでいっしょに歩いたんです。それからは、その人の顔が変わりましたね。笑顔が戻るんですよ。それは嬉しそうに、子どもに手を引っ張られながら歩くんです。ああいう表情を引き出せるのは、子どもだからこそできることなんでしょうね。また、子どもがいることによって、高齢者の活躍の場が増えます。たとえばスイカ割りや餅つきをするとき、最初は子どもたちがやるんですけども、小さい子たちばかりなのでなかなかうまくいきません。そこで高齢者の出番です。子どもたちにいいところを見せよう、とばかりに、すごく張り切るんです(笑)。子どもたちから喝采をあげて、ちょっと照れくさそうに、でも嬉しそうにしている姿には、自信が蘇っているように見えます。子どもたちと日々交流できることは、高齢者にとっては何よりの薬なのだな、と思っています」(前掲書)

子どもたちにとっては、高齢者が昔の知恵や作法、文化を温もりを持って伝えてくれることは、大人との接触の仕方を身体全体でコミュニケーションし学ぶことになる。大都市での核家族世帯では、祖父母と同居することが難しく、高齢者とどう接していいのかわからない子が増えている状況で、子どもの保護者にとっても好意的に受け止められている。親が子どもの姿を通して学んだり、経験することも多いという。保育者は、子どもが高齢者に接する場に関わることで、子どもを見る目が変わり、人への接し方の幅が変わってくるという。このことは、パラレル・キャリアの観点から考えると、保育と介護を行き来できる職場環境が保育における関わりの質を変えていくのではないかと推察できる。

3. 幼老統合ケアからみた領域「人間関係」

(1) ライフサイクル理論からの検討

では、子どもと高齢者が相互に交流する幼老統合ケア施設（保育施設）は、従来の保育とどのような違いがあるのでしょうか。また、領域「人間関係」における「高齢者とのかかわり」の項目を検討する場合、幼老統合ケアは保育実践をどのように変える可能性があるのでしょうか。

エリクソン（Erikson）は、人間の生涯にわたる発達プロセスをライフサイクルとし、西平（1993）の言葉を借りるなら、「芝居のストーリーが順序を持って展開していくのと同じ構造を個人の人生においてみたもの」として発達の相を8つの段階（ステージ）に描き出した。人は、人生の各段階において、心理的葛藤と危機に遭遇する。そして、その葛藤と危機を乗り越えることで、それぞれ8つの徳（virtue）を獲得し、その活力は人生を生きる上で自分の内に積み重なっていく。高齢者において関係の深い葛藤と危機は、8段階老年期における「統合 vs. 絶望」であり、英知（Windom）を獲得すること、そして、その前の世代、つまり7段階成人期（壮年世代・熟年世代）における「世代継承性 vs. 停滞性」であり、世話（Care）を獲得することである。成人期に迎える心理的危機であるジェネラティビティ（Generativity：世代継承性）は、その解決により他者へのケアという共生の原動力が獲得される。そして、この活力は、次の老年期へと構造的に連関し変化していくのである。

西平（1993）は、エリクソンのライフサイクル論がややもすれば、個体主義的理解によって発達を捉えられているが、そうではなく、「発達を関係論的に、より正確には〈育てる－育てられる〉という親子関係・師弟関係・世代関係の中で捉えようとするものである」と述べている。まさに、今田（2013）が要約して指摘しているように、「《相手を成長させつつ、自ら成長することが相互的になり、しかもなおお互いに異質な存在を維持すること》は世代間交流の基本原則」なのである。

このように、エリクソンのライフサイクル理論は、世代間交流を見ていく枠組みとして、一方で個体の発達特性を見ていきながらも、個体主義的理解に陥ることなく発達を関係論的に捉え、交流する相互の存在に目を向ける枠組みを提示している。

そこで、このライフサイクル理論をもとに、2つのことを整理したい。すなわち、一つは、幼老統合ケア施設（保育施設）の特徴である、人的環境としての高齢者との恒常的な交流は、何をもたらすのか。そして、もう一つは子どもと高齢者がお互いを必要とし、相互に影響し合う保育環境は、従来の保育環境を考える上で、どのような意義があるのか。この2つの観点から内容項目の「高齢者とのかかわり」を見ていきたい。

(2) 人的環境としての高齢者

第1に、高齢者のかかわりは、先に見たように、文化、遊び、育児・仕事で培った能力や経験、時代を生き抜いた生活の知恵（生き抜く力の伝承）など様々な資源を子どもに提供する。高齢者とのかかわりによって、保育の専門家ではできないことを子どもが経験し、親・祖父母とも違った多様な人間のあり方に触れることもできる。さらに、高齢者は子どものリズムに合わせて待つことができ、子どもの繰り返す行動や挑戦にも根気強く付き合うことができる。こうした多様なかかわりと子どもを包み込むかかわりは、子どもの好奇心や意欲、自己肯定感情を育む。すなわち、通常の保育環境にはない多様な資源を提供するのである。

第2に、高齢者のかかわりは、成人期における次世代育成としてのジェネラティビティ（今田、2013）が発揮されたケアに基づいている。高齢者の、無条件の愛情や後世を想うことから生じる行為は、保育者のケアとは異なるケアであり、幼老統合ケア施設において子どもたちは保育者のケアに加え、ジェネラティビティに支えられたケアに触れることになる。杉（2012）の次のような言葉は、そのことを端的に示している。

「お年寄り達には他の世代にはないふしぎな力があります。無償の愛で、人々を包み込むことができ、何事にも性急に結果を出すことをせずに、時の流れるままゆったりとした姿勢で待つことができます。そこにいてだけで周りがほっこりゆったりします。お年寄りの一言は、人生の達人としてずっしりとした重みがあります。何度も何度もあきることなく繰り返し話を聞かせてくれます。ほめるのが上手、心から心配してくれる、その言葉が温かい」(杉、2012)

このように、人的環境として高齢者を捉えた場合、保育を専門とする保育者のケアに加え、ジェネラティビティが発揮されたケアや、経験を俯瞰して捉え包み込むことのできるケア、すなわち、このケアの多重性こそ、従来の保育実践を変える可能性を秘めている。それゆえに、人的環境としての高齢者との恒常的な交流は、単に「高齢者とのかかわり」を保育内容の項目として捉えるのではなく、保育実践の枠組みを変えていくのである。

(3) ダイバーシティ・コミュニティとしての保育環境

高齢者と恒常的に交流できる環境では、保育者以外に見守る目が複数あり、多様で複線的な関係性が成立する。従来の保育環境では、子どもと保育者の2世代関係であるが、幼老統合ケア施設（保育園）では、子どもと保育者・介護者、そして高齢者、あるいは子どもと保護者と高齢者の3世代の保育環境が成立している。子どもは保育者以外の価値観や人間観に触れることで、価値観や人間観には幅があってもいいということを認識する。たとえ名前は分からなくても、いつも気にかけてくれるという結びつきの弱い関係性（弱い紐帯：Weak Ties）が、核家族化による逃げ場のないシェルターの空間や同質的な価値観に縛られた環境から子どもを一時的に解放するのである。

このような保育環境では、子どもは自発的に学び、高齢者を気遣う優しさが生まれる。高齢者が昔の暮らしや遊びを目の前で語りあるいは行為することによって、子どもはそれを足がかり（scaffolding）として、新たな発想につなげ、そこから学びの物語に発展させることができる。また、子どもは無条件の愛情やケアを敏感に感じ取り、自分に向けられたケアが相手への関心を育み、前述した取り組みのように、相手を気遣う優しさや行為が自然と生まれる。異年齢保育が子ども相互の異質性と発達の差異を保育に活用し、ヴィゴツキーの社会発達理論を背景として子どもの発達を引き上げる働きをするように、高齢者が子どもに提示した資源や、子どもに向けるケアに応答しようとして子どもが自発的に働き返そうとする姿は、人の持つ多様性や価値観を認め合えるダイバーシティが保障される環境でこそ成立するのである。

子どもによって引き出された高齢者の笑顔や優しさが、そのまま子ども自身の環境となって、子どもの良さを引き出す役割をするという相互の関係性は、幼老統合ケアにおける世代間の関係発達論の観点から子どもを捉えていくことの重要性を物語っている。

おわりに

これまで見てきたように、領域「人間関係」のなかで「高齢者とのかかわり」に関する項目を世代間交流、とりわけ幼老統合ケアの観点から検討してきた。幼老統合ケア施設（保育園）と通常の保育園の違いは、人的環境としての高齢者との恒常的な交流と、子どもと高齢者が相互に影響し合う保育環境にあり、ケアの多重性と世代間の関係発達論の観点を持つことが重要である。このことは、「高齢者とのかかわり」に関する項目をさらに深め、保育実践を再考する視点を提供してくれる。

我が国が世界でも稀に見る急速な人口減少社会に突入したことを鑑みるならば、これまでの人口増加社会を基準にした保育のあり方そのものを再検討する必要がある。

世代間交流の研究は、子どもと高齢者が、行政上も、活動・研究上でも分離されている現状を、その概念の導入によって捉え直そうという試みである。実践は多く報告されているが、まだ未開拓な分野ではあ

り、理論的にも明らかにされていないことが多い。世代間交流の基盤となる理論としては、その多くが高齢者の側からの研究であり、“世代間相互発達理論”が必要（糸井2012、中井2008）とされているが、世代間も視野に入れた関係論的な発達理論は確立されていない。今後は、世代間交流によって高齢者と子どもが相互に影響し、その関係性の中で子どもの姿を捉えていくことが重要であり、そうした世代間交流の枠組みが領域「人間関係」や保育のあり方をどのように変えていくのかを考えていきたい。

注1 人口減少社会における多世代交流・共生のまちづくりに関する研究会「人口減少社会における多世代交流・共生のまちづくりに関する研究会報告書」、全国市長会政策推進委員会・（公財）日本都市センター、2016を参照。

引用・参考文献

- ・西平直、「エリクソンの人間学」、東京大学出版会、1993
- ・多田千尋、「遊びが育てる世代間交流－子どもとお年寄りをつなぐ」、黎明書房、2002
- ・中井孝章編著、「街づくりと多世代交流」（OMUPブックレット NO.16「共生ケア」シリーズ1）、大阪公立大学共同出版会、2008
- ・中井孝章編著、「子どもの居場所と多世代交流空間」（OMUPブックレット NO. 27「共生ケア」シリーズ2）、大阪公立大学共同出版会、2009
- ・マシュー・S. カプラン他、「グローバル化時代を生きる世代間交流」、明石書店、2008
- ・草野篤子ほか編著、「世代間交流効果－人間発達と共生社会づくりの視点から」、三学出版、2009
- ・草野篤子 他、「世代間交流学の創造－無縁社会から多世代間交流型社会実現のために」、あけび書房、2010
- ・齋藤嘉孝、「子どもを伸ばす世代間交流 子どもをあらゆる世代とすごさせよう」、勉強出版、2010
- ・加藤久和、「世代間格差：人口減少社会を問いなおす」、筑摩書房、2011
- ・杉 啓以子他、「よみがえる笑顔 老人と子ども ふれあいの記録」、静山社、2012
- ・糸井和佳、「地域における世代間交流が発展するための参考理論および概念－先行文献による検討」P37-44 [草野篤子ほか編著、「多様化社会をつむぐ世代間交流－次世代への『いのち』の連鎖をつなぐ」、三学出版、2012] に収録
- ・藤原佳典、「第二章 世代間交流活動の意義」P28-35、「第三章 世代間交流活動の効果」P36-57 [倉岡正高編著、「地域を元気にする世代間交流」、遊行社、2013] に収録
- ・今田高俊、「ジェネラティビティとケア」p25-42、西平直、「ジェネレイショナル・ケア」p132-137 [西平直 編著、「第3巻 ケアと人間」（講座ケア 新たな人間－社会像に向けて）、ミネルヴァ書房、2013] に収録
- ・日本事業所内保育団体連合会、「世代間交流施設の挑戦 保育と介護はどのように融合しているのか」、あっぷる出版社、2016
- ・草野篤子ほか編著、「人を結び、未来を拓く世代間交流（世代間交流の理論と実践 1）」、三学出版、2015
- ・宮本みち子・大江守之、「人口減少社会の構想」、放送大学教育振興会、2017